○下略

〔更科日記〕そのかへる年の十月廿五日、大嘗會御禊とのゝしるに、はつせの精進はじめて、その日京を出るに、○中略その山越はてゝ、にへのゝ池のほとりへいきつきたるほど、日は山の端にかくりにたり、今はやどゝれとて、人々あかれて、やどもとむる所はしたにて、いとあやしげなる下すのこいへなんあるといふに、いかゞはせんとて、そこにやどりぬ、みな人々京にまかりぬとて、あやしのおのこふたりぞゐたる、その夜もいもねず、此おのこいでいりしありくを、おくの方なる女ども、などかかくしありかるゝぞととふなれば、いなや心もしらぬ人をやどしたてまつりて、かまばしもひきぬかれなば、いかにすべきぞとおもひて、えねでまはりありくぞかしと、ねたると思ひていふ、きくにいとむく〳〵しくおかし、○中略暁よふかく出て、○初瀬えとまらねば、ならざかのこなたなる家をたづねてやどりぬ、○中略また初瀬にまうづれば、○中略三日さぶらひてまかでぬれば、○初瀬れいのならざかのこなたに、小家などにこのたびは、いとるいひろければ、えやどるまじうて、野中にかりそめに、いほつくりてすへたれば、人はたゞ野にゐて、夜をあかす、草のうへにむかばきなどを打しきて、うへにむしろをしきて、いとはかなくて夜をあかす、かしらもしとゞに露をく、暁がたの月いといみじくすみわたりて、よにしらずおかし、

〔都のつと〕ひたちの國へ歸り侍りしに、むさしのゝはてなき道に行くれて、その夜は道づれの僧など、あまたありしも、みなかりそめの草の枕をむすびて、とゞまり侍りしほどに、此野はむかしも、ぬす人ありてこそ、けふはなやきそともよまれけるとき、ゝをきしかど、さまでやはとおもひしに、苔の衣をさへ、ひきてかへりし白波のあらかりしなごりに、いとゞ旅の床もものうくこそ侍りしか、

いとはずばかゝらましやは露の身の憂にも消ぬ武藏のゝ原